

Title	アーカイブズ学における「コンテキスト」と「ネットワーキング」
Sub Title	
Author	齋藤, 歩(Saitō, Ayumu)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.5, No.1 (2018. 3) ,p.27- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 DMC研究センターシンポジウム第7回 デジタル知の文化的普及と深化に向けて : コンテキストネットワーキングの分散型ミュージアムへの展開 開催日時 : 2017年11月24日 (金) 14:00 ~ 17:30 開催場所 : 慶應義塾大学日吉キャンパス西別館1 Keynote
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000005-0027">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000005-0027</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## Keynote :

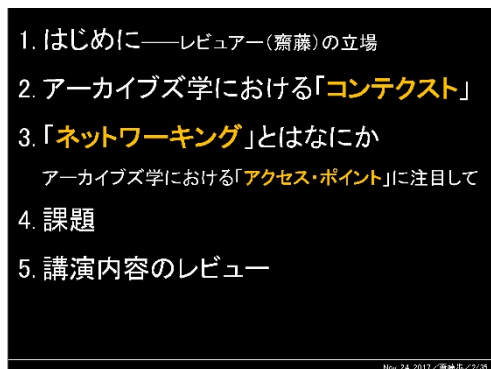
### アーカイブズ学における「コンテクスト」と「ネットワーキング」

齋藤 歩

(京都大学総合博物館 (研究資源アーカイブ系) 特定助教/アーキビスト)

本日はお招きいただきありがとうございます。依頼いただいて渡部先生と金子先生のご講演についてレビューすることになっていますが、その前に、レビュアーである私の立場を示しておきたいと思ひまして、スライドを用意してきました。

タイトルは、「アーカイブズ学における『コンテクスト』と『ネットワーキング』」です。本日のシンポジウムのキーワードを「コンテクスト」と「ネットワーキング」と理解しまして、それにあわせて、私が専門とするアーカイブズ学でこの二つがどう語られているかをこれから話します。



はじめに私の立場を説明するために、アーカイブズ学とアーカイブズ、それから勤務先の京都大学での活動に触れます。次に、2で「コンテクスト」、3で「ネットワーキング」について述べます。そのうえで、この二つに関する課題を挙げます。以上をふま

えて、ご講演の内容をレビューします。

#### 1. はじめに

はじめに、私が専門とする研究領域について説明します。

私の専門はアーカイブズ学です。国際的にアーカイブズ学は、archival science または archival studies と呼ばれます。ここでのアーカイブズとは、第一義的には公文書を指します。その意味で、アーカイブズ学は、公文書を永久的に維持・管理するための方法や考え方について検討することを中心的なテーマとする学問といえます。

アーカイブズ学で私が研究しているのは、建築分野のアーカイブズです。この分野は「建築レコード architectural records」と呼ばれる資料群を考察の対象としており、建築設計等の仕事のプロセスで作成される業務記録 (records) と個人文書 (papers) とが併存することにその特徴があります。公文書 (government records または public records) とは異なる性質を明確にする意味で、non-government records の一種にカテゴライズされることもあります。

場所	職業	対象
美術館・博物館 (M)	がくげいじん 学芸員 (キュレーター)	美術作品や文化財 や学術標本
図書館 (L)	ししょ 司書 (ライブラリアン)	本や雑誌
公文書館等 (アーカイブズ機関) (A)	<b>アーキビスト</b>	記録や文書 (Records and Papers)

このような記録や文書を扱う専門職を「アーキビスト archivist」と呼びます。聞

き慣れない言葉かもしれませんが、隣接領域と比較すればイメージしやすいと思います。つまり、文化施設として比較されることが多い MLA のうち、M のミュージアムにあたる美術館・博物館の学芸員、L のライブラリーにあたる図書館の司書と並ぶかたちで、A のアーカイブズにおけるアーキビストを位置づけることができます。

アーカイブズのイメージをさらに共有するために、違う角度からもアプローチしてみます。

「curator」で画像検索してみると、検索結果から絵画等の美術作品を対象とした仕事であることがわかります。同じように「librarian」で検索すると、書籍や雑誌を扱う職能であることがわかります。最後に「archivist」で試してみると——なかなか馴染みのない光景かもしれませんが——収蔵庫のなかで保存箱に囲まれるアーキビストの姿を見ることができます。この箱のなかには記録や文書が入っているはずですが。これらの検索結果は、三つの職能の違いを端的に表現しています。



私も京都大学で、研究者兼アーキビストとして働いております。学内での立場としては、京都大学総合博物館に所属する教員で、「京都大学研究資源アーカイブ」という

事業の担当です。

研究資源アーカイブは、京都大学の研究者や研究室による教育と研究のプロセスで作成または収集された資料を対象とした活動です。私のアーキビストとしてのミッションは、これらの「研究資源」を次の世代の研究者が利用できるように、「アーカイブズ」として整理して公開することです。



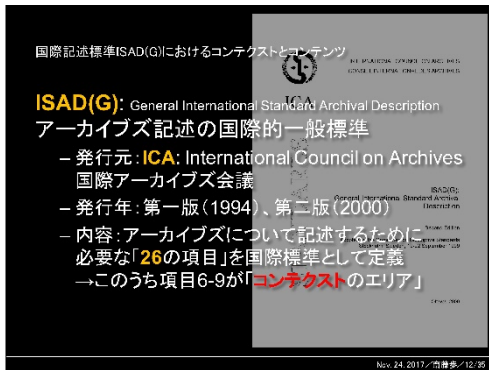
活動の概要を知っていただくために、研究資源アーカイブの主要なワークフローを紹介します。ここでは相談から公開までを五つのステップにわけています。下の写真は、これまでに公開してきた資料の一部です。詳細はウェブサイトアクセスをご覧ください。

○ 京都大学研究資源アーカイブ

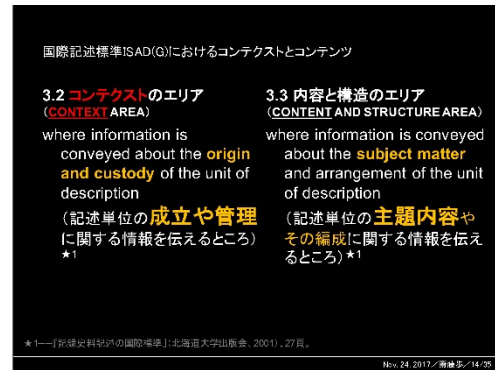
<http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>

2. アーカイブズ学における「コンテキスト」

ここからは、アーカイブズ学の研究者またはアーキビストの立場での考察となります。はじめに、第一のキーワード「コンテキスト」について、アーカイブズ学に基づいて考えてみます。



ここで考えるきっかけとして取り上げたいのが、ISAD(G)です。ISAD(G)は、General International Standard Archival Description の略称で、アーカイブズの情報記述するための国際標準です。ICA (International Council on Archives=国際アーカイブズ会議)が、1994年に初版を、2000年に第二版を発行しました——以降では第二版の内容を参照します。



ISAD(G)における、コンテキスト (左) とコンテンツ (右) の二つのエリアの比較です。コンテキストは、記録や文書の成り立ち、またはこれまでの利用や管理についての情報のことです。一方、コンテンツは、記録や文書そのものの内容についての情報のことです。

国際記述標準ISAD(G)の26項目

ELEMENTS OF DESCRIPTION	
1	1.1 Reference codes)
2	2.1 Title
3	3.1 IDENTITY STATEMENT AREA
3.1	3.1.1 Date(s)
4	3.1.2 Level of description
5	3.1.3 Extent and media of the unit of description (quantity, bulk, or size)
6	3.2 CONTEXT AREA (コンテキストのエリア)*
6.1	6.1.1 Name of creator(s)
6.2	6.1.2 Accession number / Biographical history
6.3	6.2.3 Archival history
6.4	6.2.4 Immediate source of acquisition or transfer
7	7.1 Scope and content
8	8.3 CONTENT AREA (コンテンツと構造のエリア)*
8.1	8.3.1 Appraisal, destruction and scheduling information
8.2	8.3.2 Accession
8.3	8.3.3 System of arrangement
8.4	8.3.4 Conditions governing access
9	9.1.2 Conditions governing reproduction
10	10.1.2 Language(s) of material
11	11.1 Physical characteristics and technical requirements
12	12.1 Finding aids
13	13.1 Existence and location of originals
14	14.1 Existence and location of copies
15	15.1 Related units of description
16	16.1 Publisher note
17	17.1 Note
18	18.1 Archival note
19	19.1 Rules or Conventions
20	20.1 Date(s) of description
21	
22	
23	23.3 NOTES AREA
24	
25	25.3.7 DESCRIPTION CONTROL AREA
26	26.1 Date(s) of description

ISAD(G)は26の記述項目を定義しており、そのうち6番目から9番目は「コンテキストのエリア」と呼ばれます。ここでは該当する四つの項目を黄色で示しました。これらをその下の「コンテンツと構造のエリア」と比較して理解を深めたいと思います。

国際記述標準ISAD(G)におけるコンテキストとコンテンツ

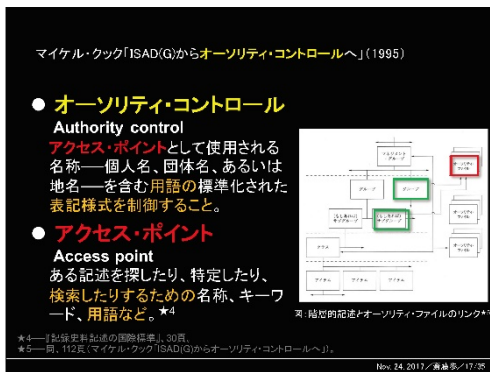
3.2 コンテキストのエリア* <sup>2</sup> (CONTEXT AREA)	3.3 内容と構造のエリア* <sup>3</sup> (CONTENT AND STRUCTURE AREA)
3.2.1 Name of creator(s) 作成者名	3.3.1 Scope and content 資料内容
3.2.2 Administrative / Biographical history 組織歴または履歴	3.3.2 Appraisal, destruction and scheduling information 評価、廃棄処分、保存年限
3.2.3 Archival history 伝来	3.3.3 Accruals 追加受入
3.2.4 Immediate source of acquisition or transfer 入手先	3.3.4 System of arrangement 編成

各エリアに含まれる記述項目です。それぞれ四つあります。ここからアーカイブズにおけるコンテキストの意味がより詳しくわかります。すなわち、「誰が作成したか(作成者名)」「その人物や組織の来歴(組織歴または履歴)」「過去にどのように管理されて使われてきたか(伝来)」「どこから収集、または移管を受けたのか(入手先)」についての情報がコンテキストです。

続く「ネットワーキング」の考察では、このうち一番目の「作成者名」に注目します。

### 3. 「ネットワーキング」とはなにか——アーカイブズ学における「アクセス・ポイント」に注目して

第二のキーワード「ネットワーキング」について考えてみます。ここでは「アクセス・ポイント」という用語に注目します。

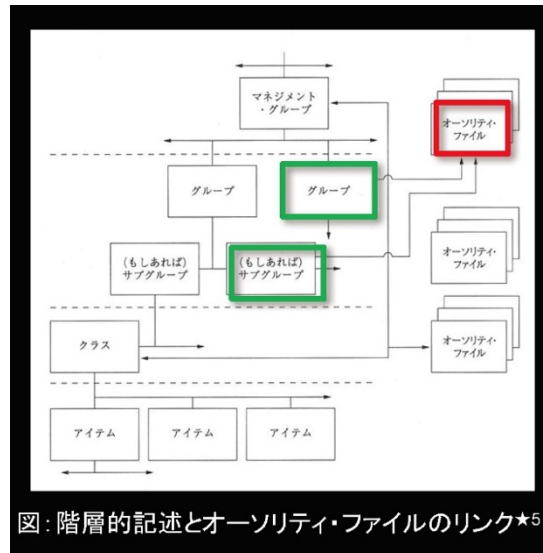


さきほど触れた ISAD(G)の初版の発行後、その開発に深く関与した英国の研究者兼アーキビストであるマイケル・クックは、「ISAD(G)からオーソリティ・コントロールへ」という論文を残しました。その主旨は、ISAD(G)を公開した次の段階は、アーカイブズに「オーソリティ・コントロール authority control」が求められるということでした。

オーソリティ・コントロールは、一般的に「典拠管理」と訳されますが、ISAD(G)では「アクセス・ポイントとして使用される用語の表記を制御すること」と定義されています。ようするに、記述する用語の表記統一です。表記が統一された用語は、「アクセス・ポイント」として使用されることとなります。アクセス・ポイントも ISAD(G)で定義されていて、「検索するためキーワード」を意味することがわかります。

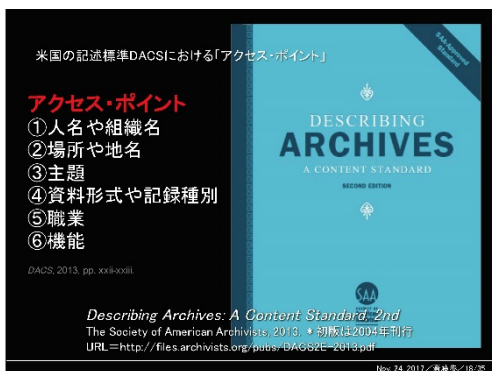
つまり、ISAD(G)による記述方法の国際的

な標準化の次のミッションは、「用語の表記統一を実施して、検索等に用いられるアクセス・ポイントを整備すること」です。クックはその考えを「オーソリティ・コントロールへ」という表現に込めたと理解できます。



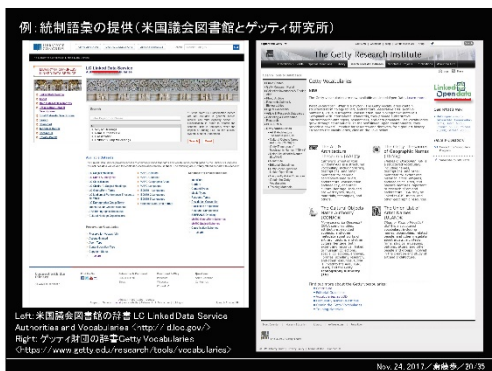
クックは、アクセス・ポイントの役割をこのような図で説明しています。赤で囲んだオーソリティ・ファイルはオーソリティ・レコードを含み、従来のアーカイブズ記述では離れ離れとなる二つのグループ(緑枠)——これは組織名を意味し、この下に作成された記録や文書を束ねています——を繋ぎます。

その後 ISAD(G)に続くかたちで、オーソリティ・コントロールのための記述標準として ISAAR(CPF) (International Standard Archival Authority Record for Corporate Bodies, Persons and Families, 2004, 2011) が、ICA から発表されることにより、クックの考えが実現しました。



では、どのような用語がアクセス・ポイントとなるのでしょうか。それを知るために、次に、米国のアーカイブズ記述標準の DACS (Describing Archives: A Content Standard) を参照します。

DACS では、アクセス・ポイントの種類として、①人名や組織名、②場所や地名、③主題、④資料形式や記録種別、⑤職業、⑥機能の六つを挙げています。これらのアクセス・ポイントの用語は、辞典(シソーラス)で表記や概念を定めます。



米国議会図書館やゲッティ研究所は、さまざまなアーカイブズ機関が参照可能な私たちで、このような用語辞典を提供しています。

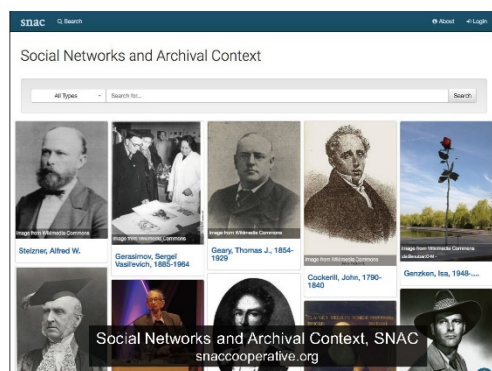
DACSのアクセス・ポイントと  
米国議会図書館(LC)、ゲッティ研究所(GETTY)

共通の用語辞典

	①人名や組織名	②場所や地名	③主題	④資料形式や記録種別	⑤職業	⑥機能
米田国会図書館名物典拠ファイル(LC Name Authority File, LCNAMF)	●					
米田国会図書館主観見出し(LC Subject Headings, LCSH)			●			
図書館資料作製辞典(Treasures for Graphic Materials, TGM)				●		
美術・建築用語辞典(Architecture Thesaurus, AAT)					●	
ゲッティ地名用語辞典(Geometry Thesaurus of Geographic Names, TGN)		●				
作家名ユニオンリスト(Union List of Artists' Names, ULAN)	●					
文化財名称辞典(Cultural Objects Name Authority, CONA)	●					

Nov. 24. 2017 / 巻数 5 / 16 / 35

これらの辞典と DACS のアクセス・ポイントの対応関係を整理すると、「①人名や組織名」との対応から、さきほどの ISAD(G)のコンテキストのエリアで第一に挙げられていた「作成者」にも関係して、二つの辞典が存在することがわかります。



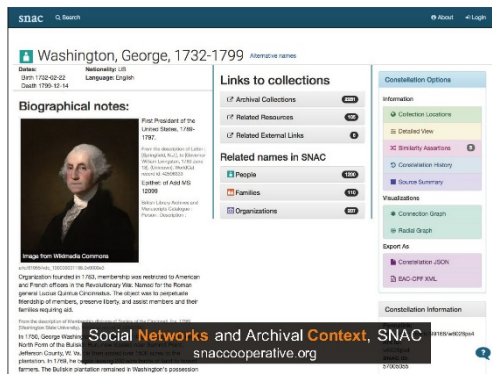
こうした用語辞典を使った事例をひとつ紹介します。米国の SNAC プロジェクト (Social Networks and Archival Context) です。オーソリティ・レコードとして表記統一された人名または組織名等をアクセス・ポイントにして、異なるアーカイブズ機関を横断して資料を検索するツールです。

ここでは、資料所蔵元の人名等のデータを図書館等で参照される国際典拠ファイルと照合することにより語彙を統制しています。したがって、このプロジェクトにより、アーカイブズには関係するが書誌情報には登場しにくい人名等の情報——例えば、著

書は残さなかったけれども資料が残された個人や団体の名称——が、既存の国際典拠ファイルに追加されていくことになります。

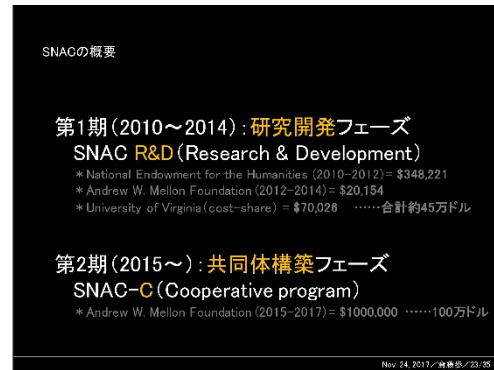
○ SNAC プロジェクト (Social Networks and Archival Context)

<http://snaccooperative.org/>

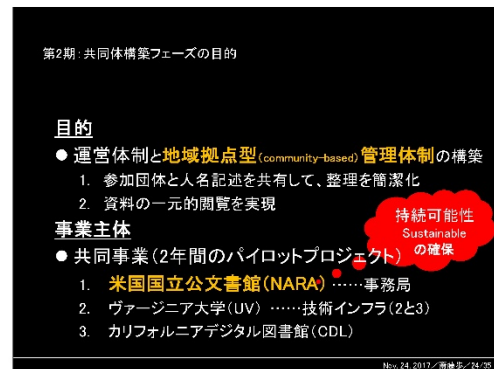


トップページの人名をクリックすると、関連する資料群 (Links to collections) や SNAC 内の関連する人名等 (Related names in SNAC) が表示されて、固有名詞を入り口にして情報を辿ることができます。人名等の引用元 (Constellation Options) や別名 (Alternative names) も参照できます。

この SNAC プロジェクトのねらいを本日のテーマにそって説明すれば、人名等の「コンテキスト」情報を活用して、アーカイブズとその関連人物名等との「ネットワーク化」を図ること、と表現できます。



2010年にスタートした SNAC プロジェクトは、現時点で第3フェーズを迎えています。このうち第1フェーズは「研究開発 Research & Development」、第2フェーズは「共同体構築 Cooperative program」が目的でした。



とくに第2フェーズは、持続性の確保がテーマでした。プロジェクトを主導する三つの組織のうち、米国国立公文書館 (National Archives and Records Administration, NARA) が事務局として運営基盤を支え、二つの大学がシステム基盤を提供しました。とりわけ米国国立公文書館の参加が持続可能性の向上に一役買ったと考えられます。

第2期: 共同構築フェーズのメンバー

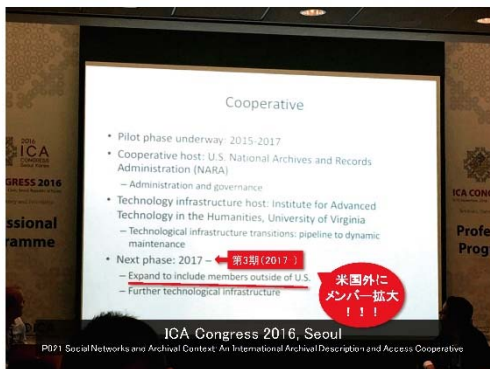
機関名	M	L	A	U
1 米国物理学協会				
2 アメリカ自然史博物館	●			
3 ジョージ・ワシントン大学				●
4 ゲティ研究所	●	●		
5 ハーバード大学				●
6 米国議会図書館			●	
7 米国国立公文書館			●	
8 ニューヨーク公共図書館			●	
9 プリンストン大学				●
10 スミソニアン協会	●	●	●	
11 タフツ大学				●
12 カリフォルニア大学アーバイン校				●
13 マイアミ大学				●
14 イェール大学				●

● 最終的には国際的に発展するが、初期メンバーは米国のミュージアム(M)と図書館(L)とアーカイブズ(A)の横断的な組織で構成される  
● 2年間は新団体の加入はないが、将来の参加申し出は歓迎

Nov 24 2017 / 第2期 / 15/25

半数が大学!

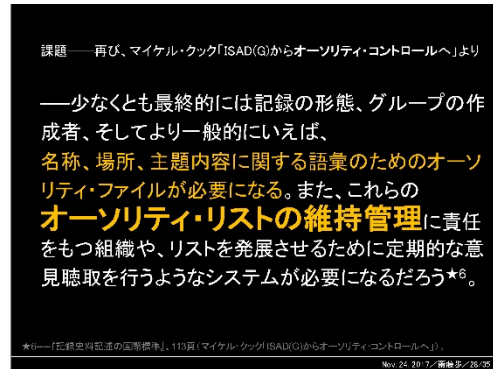
第2フェーズで情報を提供している参加機関は14団体——米国物理学協会、アメリカ自然史博物館、ジョージ・ワシントン大学、ゲティ研究所、ハーバード大学、米国議会図書館、米国国立公文書館、ニューヨーク公共図書館、プリンストン大学、スミソニアン協会、タフツ大学、カリフォルニア大学アーバイン校、マイアミ大学、イェール大学——でした。このうち半数の7機関が大学であることが特徴のひとつです。



2016年にソウルで開催されたICA世界大会ではSNACプロジェクトのセッションが企画されました。そこで、次のフェーズでは国際的なネットワーク形成へ進むことが示されました。ぜひ日本からも参加して、国内のアーカイブズに紐づく人名や組織名のプレゼンス向上に努めたいところです。

#### 4. 課題とまとめ

このような国際的な動向に対して、最後に課題を挙げます。



再びクックの論文を引用します。

ここでは「名称、場所、主題内容に関する語彙のためのオープンソリティ・ファイルが必要になる」ことを予見しています。この点は、すでに紹介したように、米国議会図書館やゲティ研究所による事典の共有や、国際典拠ファイルへの統合により実現しつつあります。

続く「オープンソリティ・リストの維持管理」についても、SNACプロジェクトで見られたように、米国国立公文書館が参加することにより持続可能性は高まりつつあります。しかし、どのアーカイブズ機関もオープンソリティ・ファイルを維持管理できる体制が整っているわけではありません。

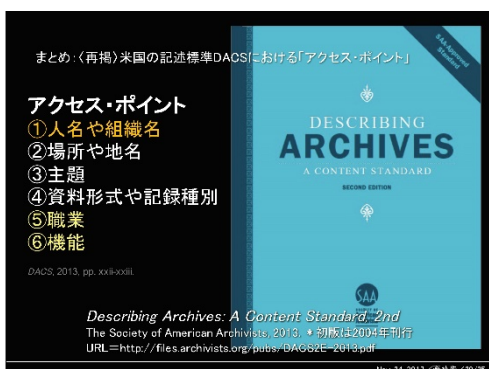


課題—京都大学研究資源アーカイブを例に

石川康美	石川日出穂丸	石毛直道
石毛直道, 1937-	石毛直道, 1937-	石田英夫, 1939-
石森秀三, 1945-	伊谷純一郎, 1926-2001	市川純彦
市川徹	鶴賀	伊藤 大介, 1918-2006
伊藤 元己, 1956-	糸川 真則, 1933-	糸川真則
井上 卓之, 1921-1995	井上 健, 1921-	今西 鏡司, 1902-1992
今西鏡司	岩倉根次	岩倉 正司
岩倉正司	岩崎敏生	岩崎 奈緒子
岩崎 奈緒子, 1961-	岩崎 奈緒子, 1961-	岩田正俊
岩波雄二郎	岩村 忍, 1905-1988	岩本俊孝, 1948-
上田 弘一郎, 1898-1991	上野益三	生山伝造
臼井寛之助	内田仁	内山亀雄, 1916-1990

例として研究資源アーカイブの人名索引を眺めてみると、語彙が十分に統制されていないことがわかります。ここに維持管理の難しさが露呈しています。

この部分はシステムの刷新によって改善を図る予定ですし、現在でも語彙の統制は可能ではあります。しかし、ただシステムを用意するだけではこの課題の抜本的な解決には至りません。本質的な解決に必要なのは、語彙の手入れに割く時間の確保です。そのためには、このような語彙の維持管理を、新規コレクションの公開と同等に評価するような意識改革が不可欠です。したがって、情報を育てていくような長期計画にも意識を向けること、およびそのことへの組織的な理解の育成こそが今後の課題となります。



本日は、ネットワークの結節点となるコンテキスト情報として、人名や組織名を取り上げました。しかし、これだけがネットワ

ークを形成する要素ではありません。例えば DACS が挙げる六つのアクセス・ポイントは、いずれもネットワークのハブとなりえます。このうち、「①人名や組織名」に加えて「⑤職業」と「⑥機能」は、ISAD(G)のコンテキストのエリアに関係しますが、それ以外はコンテキストそのものにも関係する要素です。

ここではシンポジウムのテーマにあわせて、コンテキストによるネットワークに注目しましたが、コンテキストについても同じようにオーソリティ・コントロールによるネットワーク形成の可能性があることは、続く議論の前提として理解しておく必要があります。

## 5. 講演のレビュー

渡部葉子先生の「ミュージアムとコンテキスト」では、二つの方向からコンテキストとネットワークが語られました。ひとつは「Context in Museum」で、作品にコンテキストを設定する場としてミュージアムを捉える内容でした。もうひとつは「Museum in Context」で、ミュージアムを社会的なコンテキストのなかに置くことでミュージアム自体の制度批判に発展させる内容でした。

前半の「Context in Museum」では、ゴッホの作品を例に、モノそのものに属するコンテキスト情報が四つ例示されました。すなわち「1. 展覧会という〈表現形式〉に関する情報」「2. ゴッホ・ミュージアムという〈所蔵元〉に関する情報」「3. ゴッホの最後の自画像という〈年代〉に関する情報」「4. 美術作品における自画像という〈モチーフ〉

に関する情報」です。これらは、異なる作品を結びつけるネットワークのハブとして機能すると考えられます。

後半の「Museum in Context」では、ダニエル・ビュレンの作品を、ミュージアム本来の想定とは異なる方法で展示すること、または展示室の外に置くことによって、展示やミュージアムという制度が内包する社会的コンテキストをあらわにしていました。こちらはネットワークというテーマからやや外れる印象でしたが、ビュレンが作品の展示からミュージアムという制度を批判したように、アーカイブズのデジタル化から玉石混淆のデジタルアーカイブの現状に対して、その役割や可能性を批判的に検討できるのではないかと感じました。

金子晋丈先生の「コンテキストネットワークを実現する Catalogue System」は、私が話したコンテキストやコンテンツと共通するところが多いと感じました。

はじめに、コンテンツに対する多角的な理解と新たな発見へのきっかけとしてネットワークの利点が語られました。続いて、その基本設計と方法論が示されました。そのなかで私が関心を持ったのは、「ユニファイドなシステム」という表現です。私が話した辞典をつくることや用語の表記統一と関係するような印象を受けましたが、十分に理解が及びませんでしたので、のちほど詳しくうかがいたいところです。

最後のほうで話された、ローカルなネットワークを統合することにより大規模なグローバル・ネットワークが実現するという考えにも共感しました。私が紹介した SNAC プロジェクトにも同様のコンセプトが込められていると理解しているからです。

それから、ウェブにおけるネットワークが Google や Facebook に依存する——つまりネットワークの性質が民間のサービスの仕様に依存する——ことへの批判を込めて Catalogue System を解説されました。このあたりのお話をうかがって技術的な可能性を感じた一方で、私の率直な感想としては、労力面の課題を再認識しました。さきほど私が指摘したように、コンテキストによるネットワークの作業にどれだけのリソース——時間とお金——を割けるかは素朴でありながら大きな課題です。新しいコレクションを公開することは、数的要素に換算できるので、事業の成果としてわかりやすい。一方でコンテキストによるネットワークは、コレクションをより豊かにして質的要素を向上させることなので効果の測定が難しく、組織内の理解を得にくい場合があります。その点で、コンテキストによるネットワークについてわかりやすくメリットを説明し、理解を獲得する必要性をあらためて実感した次第です。

#### 齋藤 歩 (さいとう あゆむ)

大学卒業後、都内の編集事務所で書籍やウェブサイト等の企画と編集に従事。その後 2016 年より現職。2011 年からは学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻の博士課程に在籍。現在アーカイブズ学に基づく建築レコードの管理技法をテーマにした博士論文を執筆中。